

週日の説教

金 大烈 神父 2011年8月13日(土)

《単純な心 ～天の国はこのような者たちのもの～》

今日、ミサの始まる30分前に司祭館の階段を降りようとしたら、三人の子どもが嬉しそうに香部屋に走って行く姿が目に入りました。それを見て「今日はこの三人が侍者をするのだろう。だから嬉しいのだろう。」と思いました。しかし、ミサの前に香部屋へ入ると、三人のうちの二人だけが侍者の服を着て待っていました。「もう一人の子どもが、すねて、がっかりしてしまったのではないか。」と心配したのですが、こういう心が子どもの心ですよ。

イエス様は、今日の福音(マタイ 19・13 - 15)で「天の国はこのような者(子ども)たちのものである。」とおっしゃいましたが、これはどういう意味でしょうか。一番意識しなければならないことは、『単純な心』だと思います。

幼い頃のことを思い出してみてください。その頃、一番頼りになる存在は誰でしたか。きっと親だったでしょう。子どもたちにお母さんがいなかったら、生きることができません。少し悲しいことですが、お父さんはいなくても何とかなるかもしれません。しかし、お母さんがいなかったら大変なことになります。

幸いなことですが、私たちは年をとると弱くなります。弱くなって子どものように単純になります。子どもとお年寄りの共通点は、弱さを認めていることです。弱いから頼るところを探します。他のことはあまり大事ではないのです。子どもにとっては、お母さんが一番大切です。お母さんがいなかったら駄目になると思い、お母さんの言葉に素直に従います。お年寄りになると信仰の深い人が見られるのも同じようなものです。自分の弱さを認めて、“私が頼るものは神様しかない”という心になります。だから、“イエス様に少しでも近づこう。そしてふさわしい心や振る舞いを見せよう。”とすることです。

しかし、幼い頃を過ぎて中学生や高校生くらいになると、親の言葉を無視するようになります。「親の言うことは、古くてとんでもない。」と言って、反抗するようになります。そして、自分が全て分かっているような顔をして、自分の頭で何とかしようとしみます。そのように、「自分は元気で怖いものがない」と思う者には、絶対に頼るところを求める心が許されません。信仰も同じことでしょう。子どものようなものが入れるところが、天国です。神様の教えてくださったことが全てだと思い、それに従おうとする心こそ、何よりも必要な信仰的条件ではないかと思います。

自分の頭に頼らないでください。優れた人もあまりすぐれない言われる人も、そんなに差はないのです。神様の目で見たら同じように見えます。たぶん、皆様の目にも同じように見えるでしょう。だからがっかりする必要もないし、うらやましがらる必要もないのです。本当に大事にしなければいけないことは、自分のいただいたものに対して最善を尽くし、頑張ってきたのかどうかです。それだけ

に目を向けてください。

ある哲学者がこのように言いました。「本当に賢い人の行動や考え方は、必ず単純になります。そして、自分では賢いと言いながら実際には賢くない人は、行動も考えかたも複雑になります。」これは意味深い話です。霊性的にも全く一致します。霊的に信仰の深みを体験した人は、行動や話し方が簡単になります。たとえば、「罪を犯してはいけない。」というように簡単です。しかし、霊的にあまり深くない人は、助けを求める人がいた時に「助ける方がよいのか。助けない方がよいのか。助けたら騙されるのではないか。」と複雑に考えます。複雑に考えずに「助けなければいけない。助けたい。」という気持ちで近づくのが単純なのです。

今日の福音をとおしてもう一回考えてみましょう。私たちは、自分が愚かなのに、その愚かさのために全てをかけているのではないのでしょうか。子どものように本当に素直に「私は弱いです。だからあなたが助けて下さらなければ立ち上がれません。」という告白ができるようになるのが一番必要なことだと思います。

神様の前で本当に純粋な子どもになりましょう。

ありがとうございました。

— ミサ後 —

今日の話の結論として、老いることは恵みだと理解してください。誰でも老いることを好きではありません。しかし、永遠の世界、神様の御国、永遠の命、という観点から見れば、老いることができたから、正しく神様に目を置けるのだと思います。そういう意味で、“老いることこそ、本当に恵みである”と意識しなければいけないでしょう。